

杉原千畝・日本国外交官 リトアニア

2021年10月12日、元日本人外交官杉原千畝氏をたたえるため、イスラエルのエルサレム市郊外の広場を、「チウネ・スギハラ広場」と命名する記念式典が行われたとラジオや新聞は一斉に報じた。

杉原千畝氏は1900年1月岐阜県八百津町に生まれた。英語・ロシア語を学び外交官となり領事代理としてバルト3国の一つリトアニアの首都カウナスへ赴任した。

時あたかも第2次大戦中の最中にあり、ナチスドイツは近隣諸国への侵略を繰り返していたがとりわけユダヤ民族絶滅のための暴虐には目を覆うものがあった。リトアニアの隣国ポーランドにはユダヤ人が数多く居住していた、加えて欧州各国からのユダヤ人難民が強まるナチスの迫害から逃れるため大挙してリトアニアへ押し寄せたのである。



彼らはシベリアを通り、そして日本を通過して安全の地アメリカへ逃れるため日本の通過ビザを何とか取得しようと必死のおもいで、リトアニアの日本領事館へ押し寄せたのである。領事代理の杉原千畝氏は、日本の外務省に対し何度となくビザ発給の許可を電報で求めた。しかし当時ドイツ・イタリア・日本は3国同盟を結んでいた。日本としては同盟国ドイツに対する裏切り行為は許されるものではなく、返答は否の返電しかなかった。

杉原千畝氏は苦しみ悶えながらも、本省の意に逆らい自らの責任で人命を救う決意をして通過ビザ発給に踏み切った。その時既にカウナスにもソ連兵士が進駐し、日本領事館を閉鎖し退去するよう迫っていた。残されたわずか半月の間、同氏は寝食を忘れ一日18時間ビザ発給のために没頭した。



命の日本通過ビザ

彼はリトアニアを退去する列車の中でもビザを書き続け、列車の窓から手渡す壮絶な行為をなしたのである。その数1600通におよび、救われた命は6千名にのぼる。

時を同じくしたころ、ドイツのオスカー・シンドラーは自身の経営する工場で、労働力として多くのユダヤ人を雇い入れ、結果大勢のユダヤ人の命を救った。後に国際社会ではこの例を杉原千畝に重ね“東洋のシンドラー”と呼称し、彼の決断と行為をたたえたのである。



執務室の杉原千畝

杉原千畝氏は本省の意に背いたため帰国後外務省から退職勧告を受け辞表を出し退職した。晩年は恵まれなかった。杉原千畝の人の命を救うという崇高な行為は国内では評価されず、1985年杉原千畝によって命を救われたイスラエルが彼をたたえるまで、日本では長いこと知られることはなかった。国内で知られるより以前に、海外では彼の行為は非常に高く評価され、その結果ようやく日本

政府が動いたのは2000年になってからである。河野洋平外務大臣の時代に正式に杉原千畝氏の名誉回復がなされ、このことが大きく報道され、ようやく全貌が日本国内で知られることとなった。2007年天皇、皇后両陛下（現上皇ご夫妻）が欧州訪問の折リトアニアを訪れ、杉原千畝記念碑に立ち寄られた。

また2018年、命のビザ発給80周年を記念し、安倍首相がリトアニアカウナスにある旧日本領事館（現杉原千畝記念館）を訪れている。

1986年杉原千畝氏は鎌倉で波乱に満ちた生涯を閉じ鎌倉霊園に眠っている。享年86歳であった。（2021年10月13日）



旧日本国領事館の執務机



涙してみたビデオの杉原千畝氏

参考) 2015年の日記からの抜粋

6千人に及ぶユダヤ人の尊い命を救った杉原千畝氏の勇気ある行動は、日本人でありながら実は長い間知らなかった。新聞やテレビで報道されて、氏のとった行動が当時いかに困難で苦痛に満ちた決断を要したかようやく理解できた。そしていつか機会を見つけ、残されていれば日本領事館を眺め可能ならばその執務室もこの目で確かめたいと思いつけた。チャンスがあってバルト三国（エストニア・ラトビア・リトアニア）を訪れる機会があった。行程にリトアニアの首都であったカウナス市では、杉原千畝氏の在籍した旧日本領事館を訪問することになった。以下は当日の日記からの抜粋である。

「今回の旅の主目的は杉原千畝氏の孤軍奮闘した地を訪ねることである。カウナスに到着した。ここも樹木の多い落ち着いた町で木々の間には2, 3階建ての瀟洒な家が垣間見える。坂道を上り下りしながらバスは進む。杉原千畝記念館は新市街地の一角にあった。緑に埋まった高級住宅地の中に旧日本領事館はあった。白壁でレンガ色の屋根、さして大きな家ではない。

この森閑とした住宅街に大勢のユダヤ人が日本へのビザを求めてひしめき合ったことを想像してしまう。左側の通用口から入り、狭い10畳ほどの部屋でビデオを15分ほど見る。誰もが涙している。ビザは1600枚発給され、結果6千人の命を救った。本省の意向に背き自身の決断でビザを発給した結果外務省からにらまれ日本へ帰国してから外務省を辞めて晩年は恵まれなかったが、相次いで助けられたユダヤ人の感謝が政府の同氏に対する評価を改めさせ、後名誉回復になった。

こうして実際現地に来てみて改めて日本人の誇りを強く感じた。置いてあったサイン帳に「今回の旅の最大の目的がここへ来ることだった満足」と綴った。（2015年6月12日）



杉原千畝氏の執務机



愛用のラジオ



執務室にあった家族の写真